

足助まつり・挙母祭り（豊田市）

愛知県は曳山系の祭が全国で一番多い。曳山は山・屋台・だんじり・御車おくるまなど土地によってそれぞれ固有の呼び方をするが、愛知県では一般に山車（だし）と呼ぶ。2005年愛知万博で県内の山車百両そろえを敢行。壮観の一語に尽きた。その機会に30余団体で「愛知山車祭保存協議会」という組織を作り、毎年どこかの祭日に合わせ、関係の祭保存会が集まり総会を開く。

今年の総会は10月10日足助まつりに合わせ、至学館大学主催「祭はまちの顔」というテーマでシンポジウムを行った。私がファシリテーターを務め、各地の祭囃子も披露しながら、足助まつり・挙母祭り・半田山車祭の各代表が、何故祭をやるのか、行政との関係、宗教色のない観光化した大都会の祭をどう考えるのかなど話し合った。コミュニティのため、地域の子供を育てるため、何らかの形で宗教色を尊重すべし、というのがパネラー共通の意見であった。また、国土交通省の企画観光担当部長にも参加してもらい、祭と観光の切り口で国の政策も聞いた。後、足助まつりを楽しんだ。

足助は尾張・三河から信州塩尻までを結ぶ塩の道と呼ばれた三州街道の宿場町、往時は塩の物流拠点として栄えた。平成の大合併で豊田市に飲み込まれ、県下最大の面積と人口42万の大都市の一地域となったが、足助の町並みは伝統的建造物群という文化財に指定されており、街並みが祭という演劇の芝居小屋となる。日本人ならばいつかどこかで見たような「なつかしさ」を彷彿させる山紫水明の桃源郷だ。鎮守の森は白鳳2年（652年）創建の足助八幡宮。4台の山車を中心に、鉄砲隊、棒の手の練り物が特徴。この地は家康の地元であるだけに、戦国の世を制した火縄銃のルーツと言ってもいい。もうもうたる発煙と共に、びっくりするような大音声の銃声が山間に溪流に木霊してくる。夜のハイライトは梵天というお守りを意味する竹竿を山車の上から観衆に向かって投げる梵天投げ。もし足助という郷愁に富んだ地域がなかったら、世界の豊田市と言えどもトヨタ自動車の工場群と男ばかりが目につく無機質で面白味のない白い町となっていたらう。

1週間後、10月17・18日は挙母祭り。豊田市の旧自治体名は挙母市ころもしと言う。衣川（現矢作川）に住んでいたカモ親子の母ガモが天に上がったところから「挙母」となし、子守大明神を祀ったのが鎮守の挙母神社となった。オオクニヌシの子孫が千年以上の昔住んでいたという神話のふるさとは1959年世界一の自動車メーカーの本拠地、豊田市へと変身したのだ。

山車は8両あり飾り車と呼ばれるように彫刻や大幕・水引幕・霞幕・簾幕などの幕類や襖など懸想品には日本と中国の歴史的物語や生き物が豪華に描かれ、目を見張るものがある。山車のみならず祭の神事は裸みそぎに始まり巫女舞、渡御みこ（神輿巡行）とぎよ、ならびに三味線・鼓・笛・小太鼓・大太鼓・大皮による祭囃子、加えて夜の七度参りなど、21世紀文明最先端の工業都市イメージを払拭する伝統文化がしっかり生きていた。

8台の山車が挙母神社に参集した後、各町内へ戻るときの曳き回しに、静から動への劇的なコントラストが生まれる。山車の上から花吹雪と言って大量の、常識外れに大量の花卉大の紙を播き散らす。道路をカーブするときなど進軍ラッパが曳き手を鼓舞する。この進軍ラッパは日露戦争時取り入れたという話だが…不易と流行のコントラストか！

ビルの建ち並ぶ豊田駅前的大通りを進軍ラッパとトランス状態の若い衆の奮い立つ掛け声と「花吹雪」の舞とが混然一体となりあたりを埋め尽くす観衆の興奮を誘う。

秋たけなわの空の青さと相まって豊田市という誠に特異な街の混沌の一面を現出させた。

